



## レポートの添削という名の精神修行

中部大学生命健康科学部

那須 輝顕

中部大学の堀田典生先生よりバトンを受け取りました。堀田典生先生とは大学院の博士課程3年の時に、1年間、名古屋大学の環境医学研究所の水村和枝先生の研究室で一緒に過ごしました。

私は、学部時代は東海大学で医用生体工学・臨床工学を専攻しており、現在の専門(疼痛生理)とは異なる分野を専攻しておりました。卒業研究で、依田賢太郎先生の元で痛みの研究に触れてもっと痛みの事を知りたいと思うようになり、大学院の進学を決め、名古屋大学環境医学研究所の水村和枝先生の研究室に入りました。学部時代とは異なる分野に進んだので、最初は大変でしたが、水村先生を始めとした研究室の先生方や先輩方から疼痛学や研究法、生理学全般、そして特に学部時代に英語論文を読む習慣が無かったので、徹底的に鍛えていただきました。

大学院修了後、柵から牡丹餅で、私は目白大学保健医療学部の生理学の助教に着任できました。今回は研究活動ではなく、この時の話を中心にしたいと思います。

目白大学は教育重視の大学で、院生時代から一転して、教育活動中心の生活になりました。そして1年後に筑波大学から照井直人先生が生理学の教授として着任され、照井先生の指導の下で生理学教育に携わりました。この目白大学では、生理学実習が年に30回(通年)もあるのです。医学、医療系の生理学実習として定番な実験から、マイナーな実験まで行いました。更に受講する学生数、実習に参加できる教員の数と実習室の制約から生理学実習を4つのクラスに分けて1日当たり実習を2回行うというダブルヘッダーで行い、朝からずっと実習でそれが2日間続き、2日目の最後のクラスが終わるころには教員が疲労困憊する実習

でした。更に実習を行えば、それに伴ってレポート提出が発生します。この提出されたレポートを精読して、添削をしなければいけません。この添削を照井先生と1週間おきに交互に行っていましたが、その当番に当たるとその週はレポート添削業務で1週間が終わり精根尽き果てます。ある意味単純作業の繰り返しで忍耐力をつける修行でもありました。実習が始まったばかりのレポートは、1回分の添削で新品のボールペンのインクが1本分なくなるのです。この時、初めて一本のボールペンをインクが無くなるまで使いました。私は、学生実習のレポートは軽く読み流して採点すれば良いと都合の良い妄想を抱いていましたが、教員の立場になって、その甘い妄想は打ち砕かれました。このようにとても大変なものでしたが、根気強く添削指導をしていくとレポートの質が向上しているのがはっきりとわかりました。そして実習項目が全て終わるころには、多くの学生が、私の学生時代よりも数段良いレポートを書けるようになっていました(とても恥ずかしくて誰にも言えませんでした)。最初のころの添削業務は苦行でしたが、学生のレポートの質が向上しているのがわかると、ロールプレイングゲームで学生をレベルアップさせているような感じで楽しかったです。このようにして教育することも楽しいという事を知る事ができました。またこの添削を通じて、特に考察の書き方の指導方法を私自身も学びました。

上述したように目白大学時代は、講義期間中はレポート採点と講義、実習で追われて研究をする時間をとても持てませんでした。しかし学生の長期休暇中(夏休み、春休み)だけですが、上司の照井先生と恩師の水村和枝先生のご厚意で、水村

先生の元で実験をさせて頂き研究活動を継続する事ができました。昨年の春に目白大学を退職し、今は、中部大学で水村先生の元で研究を続けています。目白大学在職時はレポート添削という名の精神修行？に追われていましたが、今は停滞していた研究に力を入れて、今までの研究成果をお蔵

入りさせないように頑張っています。この場をお借りして、今まで支援をして下さっている水村先生、照井先生、共同研究者、研究室の皆様から御礼申し上げます。また拙い文章でしたが、最後までお読みいただきありがとうございました。



## 古いサーチコイル

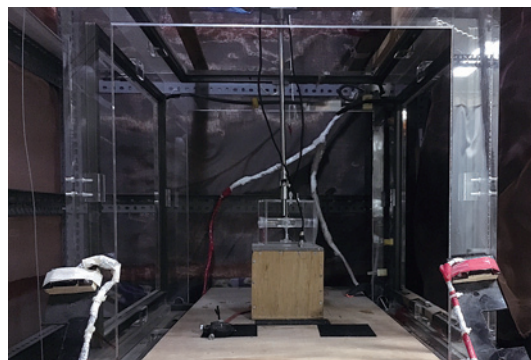
鳥取大学医学部適応生理学分野

松尾 聡

はじめまして。信州大学バイオメディカル研究所の安嶋久美子先生からバトンを受けました、松尾と申します。私は現在、河合康明教授のもと鳥取大学医学部適応生理学分野で仕事をしております。安嶋先生、ありがとうございました。バトンを受ける際にいただいた、研究生活の雑感というキーワードに基づき、記していこうと思います。

私の机は研究室の窓際にあり、窓からは大山(だいせん)と読みます)が見えます。大山隠岐国立公園の中の独立峰で、中国地方の最高峰でもあります。日本百景にも選定される美しい山ですが、残念ながら窓からは焼却場の煙突と大学病院の病棟が邪魔をして、全貌が見えません。この原稿用に写真を撮ってみようと思いましたが、生憎曇っていて大山が全く見えませんでした。山陰地方は冬の日照時間が少ないのです。

そこで窓を通した景色はあきらめ、実験室の椅子に座って写真を撮りました(図)。写真の真ん中にあるステンレスの棒を取り囲む、立方体の枠はサーチコイルです。私の仕事の一つは頭部・眼球協調運動に関連したものですが、このサーチコイルは1990年代に作られた年代物の機械で、今も頭部運動と眼球運動をモニターするために働いています。大学院で指導を受けた故中尾召三教授が導入されたもので、このサーチコイルを見ると大学院生の頃を思い出します。耳鼻咽喉科で臨床に携わっていたおり前庭に興味を持ち、生理学教室の



大学院に入りました。中尾先生は眼球運動の発現機構について、主に慢性動物を用いて研究をされてきました。当時私の実験は急性実験が中心でした。先生は色々心配されてたと思いますが、ずっと私の実験に付き合ってくださいました。私が手術を行い、実験が始まるころになるとおいでになり、実験のこと、家族のこと、生活のこと、いろいろな話やアドバイスをいただきました。実験に対しては真摯な態度でしたが、とても優しい、温厚な人柄で、とても居心地がよかった記憶があります。実験では厳しい言葉をいただきましたが、大学院の生活は楽しい充実した生活でした。当時何が楽しかったのだろうと考え、一つのポイントは様々な方との交流だったと思います。私は本来内向的な人間ですが、中尾先生の研究交流に参加することで、その恩恵にあずかることができ